

歌川国貞(三代豊国)画『相撲人形花の取組』

文化学園大学准教授(日本服飾史担当) 福田 博美

日本の相撲の古くは、「古事記」の建御雷神と建御名方神の力比べ、「日本書紀」の野見宿禰と当麻蹶速の角力に遡ると伝えられる。

本来、相撲は農作物の五穀豊穡の吉凶を占う儀礼として始まった。土俵、神明造の屋根、塩、力士が前にさげる「さがり」、横綱の注連に飾る御幣など、いずれも神事と深い関わりがある。

奈良時代に始まる宮中での七夕の「天覧相撲」は、平安時代には「相撲節会」とされた。鎌倉時代以降、武術の鍛錬として奨励された相撲は、「上覧相撲」として開催され、武将たちに愛好された。一方、諸国を巡り相撲を行う武士も現れた。江戸時代初期、「勅進相撲」が興行されて、相撲取りの番付のようなものができた。寛政元(1789)年、谷風橋之助(1750-95)と小野川喜三郎(1758-1806)に初の横綱免許が与えられた。

江戸時代中期、相撲人気とともにその風俗を描いた錦絵(多色摺りの浮世絵)の「相撲絵」が大量に制作された。中でも力士の化粧回し姿や外出姿、行司を配した取組絵の多くが大判の「一枚絵」で、土俵入りの光景や力士たちの群像は「三枚続」の形式でワイドに描かれることが多かった。

今回紹介する『相撲人形花の取組』は江戸時代後期の花形力士の操り人形と美人を取り合わせたシリーズの作品である。本館には6図所蔵され、相撲人形を操る美人の上半身が描かれた「大首絵」で、大判(38×25cm)の錦絵である。

絵師は、署名の「國貞改二代豊國画」から初代歌川国貞(1786-1864、以下国貞と表記)である。国貞は初代歌川豊国(1769-1825)の門人で、役者絵や美人画に秀でた絵師であり、多くの相撲絵を描

いた。弘化元(1844)年に、二代豊国の襲名を自称した。しかし、すでに文政8(1825)年に初代豊国の養子「豊重」が二代目を襲名していたので、実際は三代豊国である。

制作年は署名から弘化元(1844)年とされるが、国貞研究の第一人者である新藤茂氏から弘化2(1845)年頃とのご示唆をいただいた。

落款(印章)は、「年」の書体を崩した「年玉」印で、歌川一門の印とされる。

版元は「喜多孫」の印から喜多屋孫兵衛、改印は「渡」、「應需」の印は購入者の求めに応じて作成した印で、出版地は江戸である。

6図に登場する力士の名前は、「顔」と「回し」の意匠によって判別できる。第八代横綱の不知火諾右衛門(1801-54)(図1)、荒馬吉五郎(1809-54)(図2)、小柳常古(1817-58)(図3)、第九代横綱となる秀ノ山雷五郎(1808-62)、三ツ鱗龍八(生没年



図1 第八代横綱「不知火諾右衛門」の相撲人形を操る美人

不詳)、小柳春五郎(1798-1858)である。この他に、相生松五郎(1803-53)、御用木雲右衛門(1807-67)などの作品がある。顔を正面に描いたのは図1のみで、他は左右の向きが異なり、まるで二枚が対になるようである。

「相撲人形」の古くは、江戸中期の「板角力」の玩興とみられ、紙製の人形も登場した。ここに描かれた操り人形は、手で操作するもので、串が胴と両方の前腕につけられている。これはおそらく当時の人形浄瑠璃の発達に伴い、力士をかたどったものと推察される。

横綱の土俵入では、「四股」を踏む際、身を浄める意味で「注連縄」を身につけ、図1では不知火諾右衛門が腰にまとった。十両以上の力士が土俵入に着ける「化粧回し」は、現在では博多織や西陣織が主流であるが、当初「緞子」を用いたため「緞子」と呼ばれた。その紫色は、横綱許しの色とされ、不知火諾右衛門と秀山雷五郎にみられる。国貞は両者の「横綱土俵入之図」を各々三枚続に描いた。

江戸時代は大名お抱えの力士が多く、各藩それぞれの化粧回しをつけて土俵に上がった。横向きの力士(図2)は化粧回しから八戸藩のお抱えで、弘化元(1844)年に前頭2枚目から小結へ昇進した荒馬吉五郎とみられる。秀山雷五郎と三ツ鱗蔵八は違い釘抜き模様から盛岡藩である。萩藩お抱えの力士として有名な第六代横綱阿武松緑之助(1791-1852)の門人として活躍したのは、弘化2(1845)年に小結に昇進した小柳常吉と小柳春五郎である。両者とも紅白の化粧回しで、藍色の房飾りは常吉、浅葱色が春五郎である。春五郎は緑之助引退後に大関に昇進し、天保後期の土俵を飾った。

江戸相撲の黄金期には、谷風梶之助と小野川喜三郎、幕末は小柳常吉と荒馬吉五郎の好取組が人気を呼んだ。国貞は「小柳・荒馬仕切の図」を大判三枚続で描いた。まさに図2と3の対戦である。ちなみに、小柳常吉は嘉永7(1854)年にペリーが来日した時、アメリカ

人の水兵3人と同時に対戦して勝った逸話が残り、その前年に、国貞は一枚絵で闘志みなぎる小柳常吉の風貌を描写した。

「相撲人形」を手にした女性たちに着目したい。図1のお歯黒をつけた女は、島田髻に籠甲製とみられる櫛・笄・簪をつけた。流行の黒の掛衿をつけた藍と浅葱色の縞に鼠色の緋柄の留袖を二枚重ねて一つ前に着た。緋色の五分長襦袢を袖口にのぞかせ、萌黄色の襦袢の衿元をつぼめた。黒の広幅帯は二羽の鳥の丸紋で茶色の更紗風花柄地との両面仕立ての鯨帯である。図2は成人直後の年若い女とみられ、島田髻には緋色の飾り裂が巻かれた。緋襦袢には鼠色の衿、黒の掛衿に縞模様の留袖姿である。本来脇を縫いとめた留袖だが、この頃には身八つ口ができ、この後ろ姿に表現されている。鯨帯は紫と茶色の花柄で、前上部で折り曲げた。図3は振袖の袂を持って人形をかざした娘の姿である。緋襦袢には紫の衿、図1・2と同様に二枚のきものを一つ前に装い、表着は鼠色地に様々な紋尽しのきもので黒の掛衿をつけた。地味な鼠色は当時の流行色で娘たちも好んで用いた。また、黒と紫の鯨帯をやや斜めに締めた。微笑む表情に若さを感じる一枚である。同時期、国貞は縞柄を背景とした「読織当世島」を描き、本稿で紹介した3図以外にも縞柄が描かれた。最新の流行を着こなす伊達で粋な美人たちを描くことで相撲をいっそう華やかに表現した作品といえる。



図2 後姿が特徴的な「荒馬吉五郎」



図3 厳めしい面構えの「小柳常吉」